

解 答

□

問一 ア 診 イ 名残 ウ 半端 エ 面持 オ 芸当

問二 A オ B イ

問三 イ 問四 されている

問五 ・熱のあるトシを心配しながらも、母親が他の子を診療する行動。
 ・病気のトシが母親に看病してもらえないさびしさを我慢する行動。
 ・いそがしいなか帰宅した自分が、病気のトシを看病している行動。

問六 悪口はつい 問七 孤立

問八 エ 問九 ⑥ ウ ⑦ ア

問十 いくら先生が他人の心の痛みがわかる人になろうと訴えても、生徒はトシへの嫌がらせをやめないということ。

□

問一 ア 滅多 イ 突飛 ウ きょうねん

問二 ア 問三 エ 問四 ウ

問五 イ 問六 イ

問七 (1) 自分が生きている世界の前提となる不動産の条件から離れ、ありえない仮定のシミュレーションにあわせて思考法を切り替えることが難しくなっていくこと。

(2) 記憶の引き出しが重くなる

問八 ア 問九 ウ・オ

解 説

□

出典は、辻村深月「ロードムービー」。

問二 A 「やめなよ」と言いながらも、「咎める様子のない、からかう口調」なので、冗談めかして言うという意味の「茶化す」が入ります。 B 直後に不満げな言葉を発していますから、「とがらせる」が入ります。「唇(口)をとがらせる」は、不満な顔つきを表す言葉です。

問三 直前の「あの古くてボロい病院」というアカリの言葉に着目しましょう。これはトシに直接言ったのではなく、「誰かと話」していた言葉なのですが、アカリはわざとトシに聞こえるように言ったのです。トシはそれを察し、「あの古くてボロい病院」は自分の家のことなのだと分かったのです。

問四 直前の「あの古くてボロい病院」というアカリの「聞こえよがしな」言葉や、周りの者とクスクス笑っているアカリの悪意に満ちた態度によって、トシは自分がいじめの標的となったのだと察します。そしてそのことに対し、まさか自分がと、「ただ驚いた」のです。そうした心情は、[Ⅲ]の文章中では「信じられない」と表現されています。

問五 ここで登場していて、「オヤジ」がさすがだと言える相手は、トシ、トシの母親です。トシは「無言で泣いて」、母親に看病してもらえないさびしさにじっとたえています。またトシの母親は、自分の息子が熱を出しているにもかかわらず、仕事を優先し、患者を診療するために病院へ出かけたのです。「オヤジ」は、そうした二人の姿に、「さすがだな」と言っているのです。では、三人目は誰でしょう。③の直後に「胸を張るオヤジ」とありますから、「オヤジ」は自分自身のことをさすがだと思っているのだとわかります。東京に仕事用の家を持ち、トシの家と往復しながら仕事をこなしている政治家の「オヤジ」は、俺もいそがしい中、息子の看病をしているなんてさすがだな、と自画自賛しているのです。

問六 ②の直前に「悪口は続いているようだった」とあります。つまりはっきりとは聞き取れていないということです。この直前の「あの古くてボロい病院でしょ?…」という言葉はしっかり聞こえていたのですから、これらの間に、「声のトーンが落ち、小声になる」という一文は入ります。

問七 直後に「トシとワタルだけが二人きりぽつんと浮かんだ島だった」とあります。こうした状況を言い表すのに適当な言葉は「孤立」です。

問十 ⑧の中の、「トシのスリッパ」「先生の話している心の貧しさ」「結ばれることがない」、それぞれの表現が意味していることがらを考え、言葉を与えていきましょう。トシは自分の上履きを誰かにかくされ、しかたなくスリッパを履いています。したがって⑧の「トシのスリッパ」は、トシに対するいじめそのものを意味しているのとらえることができます。一方、先生は「心の豊かさや貧しさについての話」をして、トシに対するいじめを何とかやめさせようとしています。したがって⑧の「先生の話している心の貧しさ」は、いじめをやめさせたい先生の思いそのものを意味しているのとらえられます。では、「スリッパ」と「先生の話」は「結ばれることがない」とはどう

いうことでしょう。ここでの「結ばれない」は、先生の話はいじめをやめさせることにはつながらないという意味だと考えられます。以上の三つの要素をまとめると、先生の心の貧しさについての話は生徒たちの心を動かすことができず、この先もトシへのいじめは続いていくだろう、という内容となります。

□ 出典は、保坂和志「老いることに抗わない」、『途方に暮れて、人生論』所収。

問二 「現場」という言葉は、事件や事故が起こった場所、という意味で使うことが多いので、老人の老化防止トレーニングに対し使うのはふさわしくないと、筆者は考えたのでしょう。

問三 もともとは脳の老化防止という目的があったトレーニングも、テレビで面白おかしく取り上げられるようになると、その本来の目的からはなれた、ただの余興となってしまうと筆者は嘆いています。

問四 数行前に「コンピューターというのは自分がどんな部屋に設置されているか、まったくわからない」とあります。つまりまわりが見えていないのです。空欄は、同じような状況に人間が置かれたらという文脈の中にありますから、ウを入れます。

問五 ③は高校入試の試験問題に対する違和感を指しています。入試問題は「前提となる条件を理解するところから始まる」のですが、その「出題の仕方(すなわち前提条件)が面倒くさくて」理解できず、「問題を解くどころか、その問題の意味する世界に入っていけない」と、筆者はその違和感について説明しています。

問六 直後に「ありえない仮定で考えることが許せないのだ」とあります。つまり、「突飛な仮定の質問」に対し、気の利いた返事ができないのです。

問七 (1) 筆者は、入試問題に入っていけなかったことを取り上げ、その理由として、実社会とは切り離された「前提条件」が理解できなかったことをあげています。またその後につづけて、「ありえない仮定で考える」ことが難しくなってきた、とも述べています。そしてこれらを受け、「脳の老化はここに関係しているのではないか」と考察を進めます。つまり「脳の老化」とは、実社会にどっぷりつき、その実社会から切り離されたありえない仮定の話に入っていけなくなる現象を指すのでは、と筆者は考えているのです。

(2) 「脳年齢が若いということは、記憶が現実と無関係であるということ」だとし、それは経験をあまり持たないからだと述べています。逆に経験をたくさん持つ大人は、それによって「記憶の引き出しが重くなる」のであり、それこそが脳の老化である、としています。

問八 必要以上に脳の老化を防止しようとする試みに対し、まるで『死』を考えることを避けようとしているようだと批判した上で、むしろ『死』と『老い』について考えることは、文化の核であり「そこに豊かな思索が息づくのだとして、死や老いを受け入れていくことの持つ意義について説いています。

問十 問九でも見たように、老いや死について考えることは「文化の核」になるのであり、逆に軽率に老化防止にあくせくするようなことでは、その「文化の核」は作られないと筆者は考えています(→ウ)。そしてそうした文化の核や「豊かな思索」に結びつく、死や老いへの考察は、老いてこそできることなのだと述べ、脳の老化を受け入れようと説いています(→オ)。